

日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第 98 号 (2025 年 9 月 1 日号)

発行者 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町 1-25 名古屋学院大学外国語学部西村美保研究室内
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com
編集者 山内政樹 〒275-0023 習志野市芝園 2 - 1 - 2 千葉工業大学

‘Alicia’s Diary’ と母の「備忘録」

小林 千春

(KOBAYASHI Chiharu)

30 年余り前、母校の女子大で‘Alicia’s Diary’をある授業の題材に選んだことがあった。ハーディの唯一の日記体で書かれた短編で、恋愛というテーマ、そして舞台が人気の観光地、パリ、ヴェニスに設定されているのも女子大生にとって魅力かと考えてこの作品を選んだ。学生からの大多数の反応は、「難解な英語で苦勞したが面白い内容だった」、「トマス・ハーディという作家の作品を初めて読んだが興味を持った」など高評価であった。しばらく遠ざかっていたこの作品を再び思い出すきっかけとなった出来事が、昨年、起こった。

昨年の春、長い間介護状態にあった母が 91 才で旅立った。折しも新学期の初回の授業の 5 分前、ケータイに「母が心肺停止」との連絡が入り、死に目に会うことも叶わなかった。実家に残された遺品を目の前に介護の疲労と喪失感で、何も手につかない日々が漫然と過ぎていったが、後始末も長女の私の役目であり、ようやく重い腰を上げた。近くに住んでいたこともあり、残された一つ一つに母の思い出が染み込んでおり、処分するのもなかなか難しかった。妹はもちろんのこと親戚や知人にも引き取ってもらい、やっと最近、ほぼ整理が終わり片付きつつあるが、最後に残ったものが 2 つある。それは膨大な数のアルバムと母の日記であった。この日記は父が 28 年前に突然他界し、その後、母がほぼ毎日、大学ノートに記していたもので、もちろん膨大な量になって寝室のライティンビューローと飾り棚の下に置かれていた。

この日記には「備忘録」という名がつけられていて、几帳面な母らしく日付、天気、記入時間、食事の内容、薬の服用、がきちんと記録されており、続いてその日にあったこと、考えた事などが綴られていた。日記にアクセスするキーは本人のみが持つものとわかっていたが、「死んだ後、私の日記を読まないでね」とも言われなかったもので、すぐに処分せず、ざっと目を通すことにした。読んでみると、そばにいながら私は母の感じていたこと、思っていたことを全く理解していなかったことに気がついた。難治性喘息という持病を患い、いつ襲ってくるかもしれない突然の発作と、

辛い入院の日々に怯えながら毎日を過ごすことの不安、娘二人とそれぞれの家族への母親としての想い、そして老いていくことへの認識と恐怖、これらの感情に日々苛まれていたことに、当時の私は気がつくことができなかった。

近くに住んでいたとはいえ、専任校での激務が続き、週末もオープンキャンパスや公務などで出勤することも多く、朝の出勤前に顔を出し、夜、帰宅後に寝ている様子を伺うことが多かった。日中はヘルパーさんや、時折尋ねてくれる母の姉たちや友人や妹とほんの数時間を過ごすことがあったが、単調な寂しい毎日だったのだろう。拙論、‘Alicia’s Diary’の‘seamy side’（日本ハーディ協会会報第20号）に日記の役割について触れたが、母の備忘録（日記）の役割は記録として残すことと感情のほとぼしりを静めることにあったようだ。

‘Alicia’s Diary’は、一人の男性を巡っての姉妹感の争いが主旋律になっており、当時はアリシアのあざとさ、傲慢さなどに注目したが、今回改めて読み直してみても、私はアリシアの長女としての役割についての記述に目が留まった。母が妹キャロラインと一緒にパリへ行き、牧師の父は仕事で家に残り、アリシアはその世話をするため留守番することとなった。いつもはアリシアが出かけ妹が留守番だったから仕方ないと理解しているが、この旅行中に母が脳溢血で倒れ亡くなるという悲しい出来事が起こる。「牧師の父は世間に疎いから緊急時には自分が行ったほうが役にたつだろう」という一刻も早く危篤の母に会いたいという気持ちと、「自分も一緒に行きたかったのに誰かが残らなければならず自分が一番適任であった」、と長女としての責任感との狭間で揺れ動く感情を吐露する。実際に、礼拝を手伝ってくれる代理牧師を探すなど難しいことをアリシアは冷静に対処する。アリシアは、彼女自身が自覚しているように実務能力にたけ、冷静沈着である。それゆえに常に自身の欲望や感情を抑え、常識的に生きることを自分に強いる。そんなアリシアがよりによって、妹の婚約者と相思相愛になり、婚約者を奪うことになり、結果的に彼の命をも奪うことになる。この一連の恋愛の途中のアリシアの策略と行動は不可解であるが、彼女の責任感と関連すると考えると納得がいく。最終的には、皮肉にもかつてアリシアに想いを寄せていたあの若い牧師だったシオフィラス・ハイナム氏とキャロラインが結婚したことで、おそらくキャロラインは幸せになることが示唆され、アリシアは長女としての責任を果たす。アリシアがこの結婚により自分の行動に対する罪を贖ったとする日記の記述を5年後に付け加えることで、ハーディはこの日記体で書かれた特異な作品を閉じている。

小説の醍醐味は、読み手の人生のステージによって新たな様相を呈し全く違う読み方ができる事である。30年前には見えなかった新たなアリシアの一面に今回は気づくことができた。私には人生の苦しい時、辛い時、そして現実逃避したい時、いつも伴走してくれるハーディの作品が在った。このような作家に出会えたこと、また出会わせてくれた今は亡き恩師はじめ、ハーディ協会の先生に心から感謝している。

現在、コロナ禍を含む6年間に渡る学長としての任を終え、新しい環境で教壇に立ちながら将来ある意欲的な学生たちと向き合っている。やっと、私なりの「備忘録」を書き始めようと思う余裕が出てきた。

ハーディとトロロープの小説に描かれた女性移住者

橋本 史帆

(HASHIMOTO Shiho)

こしばかり、ハーディ以外の作家にも視野を広げ、移住や移民の問題と結び付けながら、ヴィクトリア朝文学に描かれている帰国者の問題を扱ってきた。このテーマに興味を持ったのは、ハーディの小説に異国から戻ってきた登場人物が多く登場するからであったが、実のところ、ほかにも理由があった。私の曾祖母は若い頃、当時まだイギリスの自治領であったカナダのバンクーバーに留学し、その後、アメリカに移住、亡くなる前に日本に戻ってきたという、まさに帰国者としての経歴を持っていたからだ。曾祖母は私が幼い頃に亡くなったため、どのような人生を歩んできたのか、詳しいことはわからない。ただ、第二次世界大戦をカナダかアメリカのどちらかで過ごし、その後、アメリカで長く生活してきたことから、その歩みは決して平坦ではなかったはずだ。そのような曾祖母にとっては、戻ってきた日本の方がむしろ異国だったかもしれない。そんな彼女の心の内を知ることは、今となっては叶わない。だからこそ私は、小説の中に登場する異国から戻ってきた女性たちに出会うたび、曾祖母のことを考えてしまう。彼女たちの姿を通して、曾祖母の人生の一端を想像してしまうのだ。前置きが長くなってしまったが、ここからはハーディとアンソニー・トロロープの作品に描かれた女性の帰国者たちに注目し、彼女たちの暮らし方や背景を、物語の中から辿ってみたい。

『日陰者ジュード』(1895)では、ジュード・フォーレイとの結婚生活がうまくいかなかったアラベラ・ドンが、オーストラリアへ移住する。ハーディはアラベラのオーストラリアでの暮らしを詳しく描いていないが、彼女の言葉の節々から、その一端が垣間見られる。アラベラはオーストラリアでリトル・ファーザー・タイムを出産後、生活のために子供の養育を両親に任せている。19世紀のシドニーに住むシングルマザーについて研究したターニャ・エヴァンスは、ワーキング・クラスの未婚女性が貧しさのために子供を孤児院に預けざるをえなかったり、女性の低賃金と雇用機会の乏しさから家庭が破綻することも珍しくなかったと指摘している(75-77)。このような状況は、息子を育てることさえままならなかったアラベラが、見えないところでいかに困窮し、孤独と闘いながら生きていたかを読者に静かに伝えている。

さらに、アラベラはカートレットと結婚するが、彼女がカートレットとの暮らしを振り返る場面では、酒を飲んだ彼にひどい目にあわされたと言っている。アラベラがカートレットのもとを離れてイギリスに戻る決断をしたのも、夫との激しい口論にあった。おそらく彼女はカートレットから家庭内暴力を受けていたと考えられる。19世紀のオーストラリアとカナダにおける女性と労働について分析したレリーン・フランセスらは、その研究の中で家庭内暴力に苦しむ貧しい女性について述べている(63)。異国の地で暴力にさらされ、居場所を見付けられずにいた女性たちの姿が、アラベラの姿に重なって見えてくる。ハーディは、女性移住者のこうした苦境を見過ごさずに描いている。

次に、『日陰者ジュード』に先立って出版された、トロロープの『ジョン・カルディゲイト』(John Caldigate, 1879)を見ていきたい。これはオーストラリアへの移住が巻き起こす重婚問題を描

いた作品だ。名家カルディグイト家の長男ジョン・カルディグイトはオーストラリア移住を目指す中、同地に向かう船上で知的で上品に振舞う魅力的な元女優ユーフェミア・スミスと親しくなる。そして、このユーフェミアは現地に到着すると、型破りな女性移住者となる。シドニーに着いたユーフェミアは名前を偽り、劇場で踊り歌う人気女優となる。その後、金採掘で成功したジョンと再会すると、正式に結婚することなくカルディグイト夫人と名乗り、ジョンとともに金鉱採掘に携わり、財を築いていく。やがてジョンと別れたユーフェミアは、金採掘仲間のクリンケットと関係を持ち、やはり婚姻関係のないまま彼の姓を名乗って同棲生活を始める。ユーフェミアは結婚に縛られず、美貌と才覚を武器に、男性の領域である事業家の道を歩んでいくのだ。

当時、オーストラリアに送られたミドル・クラスの女性は、「家庭の天使」として移住先にイギリス人の家族を作り、イギリスの文化と価値観を定着させる役割を期待されていた。ユーフェミアは貧しい家の出身ながらも、その振る舞いから、ミドル・クラスの女性のように位置付けられている。しかし、彼女はその期待を軽やかに裏切り、自らの選択で力強く生きていく。トロローブは彼女の心情や暮らしの詳細を描いてはいないが、異国で生き生きと暮らし、成功を収める女性としてその姿を描いている。

このように、ハーディとトロローブは、移住女性が直面する困難や、時に本国では得られない自由や成功を描いている。その記述は作品全体の中でもわずかに占める程度ではあるが、異国で生きる女性たちの孤独と苦悩、そして力強さは、読者の心に残る。彼女たちの人生に触れるたびに、曾祖母もまた、様々な困難と束の間の喜びを感じながら生きていたのではないかと思うのだ。そしてそのたびに、異国で生き抜き、日本に戻ってきた曾祖母の人生に深い敬意を抱かずにはいられないのである。

引用文献

Evans, Tanya. “The Meanings and Experiences of Single Mothers in Nineteenth-Century Sydney, Australia.”

Annales De Démographie Historique 1 (2014): 73-96.

Frances, Raelene, Linda Kealey and Joan Sangster. “Women and Wage Labour in Australia and Canada, 1880-1980.” *Labour/Le Travail* 38(1996): 54-89.

Jude the Obscure に関する覚書

高田 英和

(TAKADA Hidekazu)

リトル・ファーザー・タイムの「死」の行為と行動が、理解不能で尋常ではない、言うなれば「狂気」じみているのは、端的に言うと、この世界（即ち資本主義の世界）、その「外部」を目指していることと深く結びついている。

ドアの後ろに服をかけるかぎが二本ついており、そこから末の二人の子供の体が、首にトラソクの紐をまきつけて、ぶらさがっていた。一方、そこから数ヤード離れたくぎから、同じ風に

して、小ジュードの体がさがっていた。しかし、女の子と男の赤ん坊の目は閉じられていた。
(404-05) (注1)

一枚の紙が床に見つかった。それには、少年の筆跡で、持っていた鉛筆の切れはしで、次のようにかかれていた。

「ぼくらはおうすぎるのでやりました」 (405)

このように、リトル・ファーマー・タイムの「死」は、この世界においては「狂気」にならざるをえない。と言うのも、この世界に生きる通常の人々には到底リトル・ファーマー・タイムのそれは、理解できないものとなるからである。なので、リトル・ファーマー・タイムの見た目と外見もこのことと関連して、たとえばスーがリトル・ファーマー・タイムを初めて見たときに或る意味通常の子どもとは掛け離れた容姿に驚きを隠せない（故に咄嗟に部屋に籠もる）のであり、或いはエレイン・ショウォルターの論考（“Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle”）が言うようなリトル・ファーマー・タイムに見られる梅毒の影響とその表象は、このことの隠喩として機能し存在していて、決して逆ではない。つまりはリトル・ファーマー・タイムが梅毒ゆえに奇怪というような関係性ではないことになる。（言うなれば、リトル・ファーマー・タイムの「狂気」は、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』のアリスのそれと繋がっているということ、そして、且つ、ウィーダの『フランダースの犬』のネロとパトラッシュの「死」と非常に親和的であるということでもある。）

他方、ジュードが、1) 学生たちの前で「ラテン語」を披露することと、2) 大学の「教員」にあしらわれることが、ジュードにこの世界の「外部」を志向させるに至ったに違いない。

「いいぞ！すばらしいラテン語だ！」と学生の一人が叫んだ。もともと、一言も彼〔学生〕にはわかっていなかったが。(144)

そっけない文面で、必ずしも彼〔ジュード〕が期待していたものではなかった。確かに学寮長本人の手紙であったが、次のように書かれていた。

拝啓 あなたの手紙を興味深く拝見いたしました。御自身を肉体労働者と書いておられることから判断して、あなたは、他の針路をとられるよりも、ご自身の仕事をこつこつしてゆかれる方が、出世の見込みははるかに大きいかと失礼ながら愚行いたします。それ故、そのようになさるよう忠告申し上げます。 敬具 (138)

これら二つの場面には、ジュードの生きる世界の駄目さが表れている。換言すると、サロンので排他的な「学問」の集団はジュードのような他者で異質な人物を決して受け入れはせず、常に既に排除し排斥する。ゆえに、ジュードはこのような世界で生きることの価値と意味を失ったのであろう。だとすると、ジュードの「死」は或る意味逆照射的に非常に意味のある行動・行為であると捉えられるだろう。そう、ジュードは「死」を肯定的に受け入れ、否、寧ろ大いに望んでいる。それは、この世界の「外部」、その希求と強く結ばれている。

このジュードが表象する「学問」への不信感、否、絶望感は、リトル・ファーマー・タイムにも見られる事柄であることは重要であるだろう。オーストラリアからイングランドへと遣って来たり

トル・ファーザー・タイムは「学校」へと通うことになる。だが、そこで、他の子どもたちから、端的に言うと「いじめ」にあうこととなる。そう、リトル・ファーザー・タイムは虐められている。

ドアが再び開いて、別の人影が入ってきた——小さな、時爺の姿だった。子供は泣いていた。スーは、授業の合間に会いたくなれば自分がいる所を教えてあった。足場から降りてきて言った。「どうしたの、坊や？」

「学校でお昼をいただくまで居られなかったんだよ、みんないうんだ——」子供は、何人かの生徒がお前の母親は名ばかりだろうとあざけったことを話した。(362-63)

ここにも、ジュードの場合と同様に、「学校」は「学問」と相通じて非常に閉鎖的で閉塞的な場・場所であることが分かるだろう。このように、リトル・ファーザー・タイムは、ジュードと同じように、虐げられている。このことから分かることは、「学問」や「学校」言うなれば「教養」というものが、実のところ非常に駄目なものであるということである。これは言い換えれば「文化」ということでも良いかもしれない。ここで押さえておきたいのは「文化」＝「教養」の駄目さという構図があり、これは換言すると「帝国主義」＝「資本主義」のそれと相関関係にあるということであり、そうすると、リトル・ファーザー・タイムならびにジュードは「文化／教養」と「帝国主義／資本主義」の餌食になっているということとなり、と同時に、逆に言えば、リトル・ファーザー・タイムおよびジュードはこの関係性を結局のところ最終的には批判し否定していることになる(注2)。

注

1. ページ数は原著の記載となる。なお、和訳は藤田訳を用いている。
2. この「文化／教養」と「帝国主義／資本主義」(且つ「リベラリズム」)との関係性、その詳細については、高田を参照。

引用文献

Hardy, Thomas. *Jude the Obscure*. Wessex ed., Macmillan, 1912. [トマス・ハーディ『日陰者ジュード』藤田繁訳, 大阪教育図書, 2011 年.]

高田英和「「ブライト・ヤング・ピープル」の黄昏と戦間期以降の英国リベラリズムの文化」『ブライト・ヤング・ピープルと保守的モダニティ——英国モダニズムの延命』高田英和他編著, 小鳥遊書房, 2022 年, 107-25 頁。

「ハーディと私、その後」

杉本 宏昭
(Sugimoto Hiroaki)

とても幸運なことに 2024 年 3 月から 1 年間 Exeter 大学で研究をさせてもらう機会を得た。Exeter 大学を選んだ理由はいくつかある。まず Dorchester に比較的近いこと。次に London まで乗り換えなしで行けること (Heathrow 空港へは直通バス)。そして Angelique Richardson 教授がいること。Richardson 教授は超一流。Hardy に関することなら隅の隅までご存じだ。彼女が手掛ける Hardy's Correspondents プロジェクトは、調べる度に毎回新しい世界を見せてくれる (<https://hardyrespondents.exeter.ac.uk/index.html>)。Exeter 大学の研究環境そして Victorian Studies センターの先生方も最高だ。Exeter の街も魅力がいっぱい。住んでいて誇らしくなった。

「ハーディと私、その後」ということで、本来なら研究に関して書くほうが良いかと思われるが、今回は各地を訪れたことを書きたい。今まで小説に登場する地を様々訪れてきた。2002～2003 年にかけて自転車で各地を回ったこともある。今回は絶好の機会なのでその続きをしてみた。

Exeter は、会員の皆様がお持ちの Wessex の地図を見れば、Outer Wessex の Exonbury である。Devon 州の北に目を向ければ、海沿いには Combe Martin、Dunster Castle、Barnstaple (Wessex 名: Cliff Martin, Stancy Castle, Downstaple) がある。もし皆様が行かれるならば Taunton からバスに乗り Dunster Castle—Lynmouth—Ilfracombe—Barnstaple—Exeter のルートで一泊二日が良いでしょう。ただし夏しか運航しないルート (最高に exciting な経験ができます) があるので要注意。

Exeter からバスで 20 分程度、Tryphena Sparks の墓を探しに Topsham へ。今は Co-op となっているが The South West Tavern も写真に収めた。バスに 40 分乗れば *The Romantic Adventures of a Milkmaid* の舞台と思われる Chillington Wood (実名: Killerton House) へ行ける。

Sturminster Newton へは電車とバスで 2 時間ほど。道中 Marnhull の The Crown (The Pure Drop Inn) と St. Gregory 教会にも立ち寄る。Sturminster Newton では Riverside Villa のわきを通り大きく散策。ハーディが London に旅立つ前夜過ごした Vine House も今回写真に収めた。帰路、Yeovil へ St. Peter Street 7 番地を見に行く。もはやないのは知っていたがその場に立ってみると少し悲しい。Plymouth の York Street 10 番地 (エマの生まれた家) も同じだった。

Two on a Tower の塔のモデルは？前から気になっていた。Bere Regis 近くのオベリスクが位置関係からすると塔の場所と目されている。しかし、このオベリスクには以前行ったことがあるが、これが塔のモデルだとはどうも納得できない。F. B. Pinion や Herman Lee は Charborough House にある塔について言及していたが、今回諸事情で訪問できずとても残念。その代わり C. G. Harper が言うところの Horton Observatory へ行った。様々訪れた中でも行くのが大変な場所の一つ。Bournemouth から 1 時間バスに乗り Wimborne Minster へ。そこから雨の中自転車 40 分。「なぜこんなところに？しかしこれなら納得」と思える塔を発見。この建築物は 'Folly' と言われるカテゴリーに入るらしい。小説中 'folly' という単語は Viviette の Swithin への恋と結婚に関する文脈で使用されるが、塔が 'Folly' の 1 つなら Swithin と科学への当てつけであろうか？と勝手に想像をめぐらす。

London に話を移そう。今は案内のみ残る the Hardy tree、Adelphi Terrace 8 番地 (大きすぎる!)、ハーディがエマと結婚した St. Peter 教会 (訪問時は改装中)、フローレンスと結婚した St. Andrew 教会 (常時施錠)、ハーディがデザインした altarpiece が見られるウインザー城近くの All Saints 教会は、1 回目は運悪く施錠されていた。2 回目は訪問を事前に知らせていたためか、案内をしていただいた。

全ての場所に行くことができるとは考えていないし、実際と想像が半分ずつの世界では「ココだ!」と言える場所もない。しかし、Abbotsbury の Tithe barn (The Great Barn のモデルの一つ) を

再訪した際改めて思ったこと、ネットや Google Map でも見られるのだがやはりこの苦労と体験はやめられない。

1) Horton Observatory



(いずれも本人の撮影、許可取得済み)

2) Altarpiece



《シンポジウム予告》

ハーディをどう読むか——若手研究者を中心に

はじめに

坂田 薫子

(SAKATA Kaoruko)

今回のシンポジウムは敢えて統一テーマを掲げず、若手研究者が中心になり、それぞれの興味からハーディを読み解いていきます。まず、永盛明美先生がハーディの詩と短編小説「リール舞曲のフィドル弾き」に見られる音楽性を読み解きます。次に、廣瀬絵美先生が作品に登場するフォークソングに注目し、『はるか群衆を離れて』を読み解きます。そのあと、加藤彩雪先生が D. H. ロレンスの『トマス・ハーディ研究』を分析し、ロレンスから見たハーディを読み解きます。そして最後に、坂田がアセクシュアリティという性的指向から『日陰者ジュード』を分析します。司会者を除き、新進気鋭の研究者の皆さんに、新鮮なハーディ観を披露してもらうことで、フロアとともに活発な質疑応答が生まれることを期待しています。

ハーディ作品における田園の音楽性——「フィドル弾き」が奏でる喜びとその陰影

永盛 明美

(NAGAMORI Akemi)

短編小説「リール舞曲のフィドル弾き」において、ハーディはフィドル弾きの奏でる旋律によって人々が舞い踊るシーンを印象的に描き出しています。同様の主題は詩「フィドル弾き」にも織り込まれており、この詩は、ハーディの第3詩集『時の笑い草とその他の詩』(1909)に所収された18篇の詩よりなる「一連の田園の歌」の一篇に位置付けられます。「一連の田園の歌」についてベイリーが「田園生活の喜び」を強調していると指摘するように、詩「フィドル弾き」もまたハーデ

ィの故郷に息づく生の「喜び」を、詩人の幼少期より親和性の高かった音楽とダンスを通し描き出しているといえるでしょう。しかしながら本詩作品に書き込まれるのは、「喜び」のみにとどまりません。本発表では、詩「フィドル弾き」を中心に、本詩作品と深い関連性を持つ短編小説「リール舞曲のフィドル弾き」に分析を加えるとともに、「不死鳥亭でのダンス」や「カントリーダンスの一時停止」などの他の詩作品にも焦点を当て、ハーディ作品における音楽性とダンスのもたらす効果について考察します。

『はるか群衆を離れて』におけるフォークソング

廣瀬 絵美

(Hirose Emi)

ハーディは、小説の中で登場人物の心情や物語の展開を示唆する象徴として、しばしばフォークソングを用いています。彼自身も地元ドーセットのフォークソングの収集を行っており、この伝統歌謡に深い造詣を持っていました。この背景には、19世紀後半に展開された、消えゆく田園地帯の歌を記録・保存しようとする英国民謡復興運動との関連性を見ることができます。ハーディは、フォークソングが日々の生活のなかで歌われている情景を小説のなかで鮮明に描写することで、別の形で民謡復興運動にアプローチしていたのではないかと考えられます。このような視点から、本発表では、『はるか群衆を離れて』におけるフォークソングを紐解きながら、歌が、バスシバや他の登場人物にどのような心理的作用をもたらし、さらにはコミュニティ内の関係性や階級的な差異、社会的価値観を浮かび上がらせる手段として用いていたのかを読み解いていきます。

19世紀の終わり、20世紀のはじまり——D. H. ロレンスによるハーディ的遺産の継承

加藤 彩雪

(Kato Ayu)

D. H. ロレンスは、トマス・ハーディの約40年後に生まれ、1930年に短い生涯を終えました。よく知られているように、19世紀末から20世紀初頭の西洋社会では既存の価値体系が揺らぎ、人々はそれに代わる新たな指針を模索し始めていました。ロレンスもまた、当時の知識人の一人としてこの時代的課題に向き合い、人間の身体にこそ現代を再構築する鍵があるのではないかと考え、その探究に真摯に取り組みました。このような身体への関心から見ると、ロレンスは一見ハーディとは趣を異にする作家のように思われます。しかし彼は、『トマス・ハーディ研究』において、ハーディの小説を高く評価しています。本報告では、時代的背景や生活した地域の違いを踏まえながらも、ハーディのテキストが時を越えてロレンスにどのような影響を与えたのかを検討します。ロレンスはハーディのどのような思想を受け入れ、また何を受け入れられなかったのか——その輪郭を明らかにすることが本報告の目的です。

アセクシュアルとしてのスー・ブライドヘッド

坂田 薫子

(SAKATA Kaoruko)

司会を務める私は決して若手研究者ではありませんが、最近、特に21世紀に入り、多様な性のあり方が認知されるようになってきており、耳に、そして目にする機会の増えてきた「アセクシュアリティ」という性的指向から『日陰者ジュード』の準主役のひとり、スー・ブライドヘッドを読

み解くことで、パネリストとしてもシンポジウムに貢献しようと思います。発表では、スーを「アセクシュアル」の女性としてとらえ、自分の性的指向を表現する言葉を持たなかったスーは、ミランダ・フリッカーの命名した「解釈的不正義」によって苦しめられていたという観点から作品を読み解く可能性を探っていきます。

《特別講演予告》

トマス・ハーディと英文学教育成立事情

慶応義塾大学教授

原田 範行

(HARADA Noriyuki)

周知の通り、トマス・ハーディは20世紀に入ってから、イギリスの5つの大学より名誉博士学位を授与されている。1905年（アバディーン）、1913年（ケンブリッジ）、1920年（オクスフォード）、1922年（セント・アンドリュース）、そして1925年（ブリストル）である。1910年にメリット勲位を受け、その後、いくたびもノーベル賞候補に推挙されたことを考え合わせると、『日陰者ジュード』が受けた批判的世評からわずか10年の間に、ハーディ文学への批評界の反応が大きく変化していることが分かる。注目すべきは、当時のイギリスでは、大学をはじめとする諸種の高等教育機関において、いわゆる英文科が新設され、文学教育のカリキュラムが、そして文学研究の方法論が整備されつつあったということである。新設された英文科が、何をもって専門的な文学研究を構築しようとしていたのか、ヴィクトリア朝の批評界は其中でどのような影響力を発揮したのか、そしてその中で、ハーディ文学の何が、どのような経緯を経て、こうした英文学教育成立事情にかかわっていくことになったのか。この問いを考察するには、ハーディの文学的探求の本質的な問題への洞察とともに、19世紀末から20世紀初頭にかけての社会および批評界の動向、第一次世界大戦、ハーディ自身のジャンル横断的な文学活動、レズリー・ステューヴンやエドモンド・ゴスらとの交流、ヴァージニア・ウルフやD・H・ロレンス、J・クーパー・ポイスといった若手作家への影響、そして当時の英文学教育・研究において定着しつつあった参照基準といったものをトータルに視野に収めて考えていくことが必要になる。本講演では、そのための見取り図を描くことを念頭に、その見取り図を描きつつ、改めてハーディ文学の文学史的意義を考察することができればと考えている。

《内外ニュース》

会員の訃報：2025 年 8 月 7 日に海老根宏先生(東京大学名誉教授)がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

《編集後記》

協会ニュース第 98 号をお届けします。2025 年 4 月から始まった関西万博がいよいよ残り 2 か月となりました。テレビでは、連日 10 万人を越える来場者数で活気づく(あるいは行列に並ぶ)人々の姿が放送されています。その熱気に煽られるように上昇を続ける夏の暑さ、気温にうんざりしながら、エアコンで快適な研究室で一人、編集後記を執筆しております。日本ハーディ協会に入会した 20 数年前と比べて、夏の平均気温が 10 度近く上昇しているというニュースを見ると、環境の変化を感じると共に、自分を取り巻く環境の変化、時の流れをしみじみ感じる夏でした。そんな折に、ハーディ協会会員の海老根先生がご逝去されたという知らせが届きました。海老根先生のご冥福をお祈りいたします。

ご多忙の中、玉稿をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。今号もバラエティに富み、充実した内容の記事が揃いました。次号は 2026 年 4 月発行予定で、投稿の締め切りは 2026 年 2 月 20 日です。論文、随筆は 2,000 字程度、短信、個人消息は 500 字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご投稿ください。(編集者の責任で内容を編集する場合があります。また、編集者と会長の判断で掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。写真を付ける場合は、被写体となった人物や撮影者等の掲載許可を得てからご投稿ください。著作権のある図版等については、あらかじめ掲載許諾の処理を済ませてからご投稿ください。) ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。

日本ハーディ協会ニュース 第 98 号

HP 公開日 2025 年 9 月 1 日

編集者 山内 政樹

(YAMAUCHI Masaki)
